我かしこ[illegible]　全

859
72

ガラス使用

青谿書屋

此書ノ年月ニテ版本トナルモアリト國書解題ニ見エタリ
明治四十二年十二月廿六日藏架

白棒子

859-72

帝國圖書館藏

我かしこの記

我かしこよ事影るハ幽玄（ゆうげん）なしとて家の谷にを嫁るへさいましめかしとやはもハわかしこれかりの文字思（おも）ひてしむかし後撰とくとくしけし百れ和か（やまと）の手ハこうなる第一親に不孝なるを我かしこより父の教訓（けうくん）に背きつらんハ母ハ愚（おろか）なりとわ影るりて背（そむ）きつる君に離（はな）れても気るとをしてまつを我かしこよりなりへ心を悩ましこ誘（いざな）はれゆくといふらむ我ありて悲しとまつらふ我賢（わかしこ）かり若者（わかもの）に諫（いさ）め明（わうゆう）に悪（ふく）まれしを悪かしこよりまた帰ハ亡（ふうふ）に

門区圖書部

明治四二・一二・二六・購求

抑しかれハ兄弟ハともに志をしらしめ我にしたかふ所の教
をもしれハ我にしたかふより勢（たよ）りくるうさもあるをも用ひハ能ふによ
れ上手を得るとなし我かしこからん儒釋（じゆしやく）道れ之志たし
つふさに我賢より非乃御みちに背き我かしこき
て天地れ道をうしなひて必不幸（ふかう）短命（たんめい）
なり家をもうしなひ榮耀（えいよう）をもきはめ身を亡し
此掟（おきて）をそむき法をたかし我ハ罪（つみ）せうとも天下れ害（がい）とな
おそれことを我かしこふれ人ニあり古今（こきん）一切れ罪（つみ）人と成る
に過るものなかるへしハ何しかれハ我知りかしこふりて天
あるしかも志きしても我しらすしかりて人ニ背かしめて知らさる

物かたり我知らしこれ善（ぜん）を悖（せ）事よ必なりもとるみやかなり

一 庭前に山を築（きつ）き人々ともに称（ほか）れハ山れ傍（つ）あるも是も高
き山より下れくと見る人ハこゝしと思ふんや我かしこハ識り
恥（はぢ）ぬしとまなしらや井蛙（せいあ）者（しや）といふへきことをれ知るそ

一 碁を圍む人我碁ハ何限りもと一二ゐを能くゐるとふれのき
勝劣（しようれつ）れ品しそみゆるとのをかくなりやしはしても万手
藝能（けいのう）さるものれ上手とおもひ我と技能（いきか）なるるもあり人れ手
よりハ人進退（しんたい）し來るとやしかるにも短き未熟（みじゆく）れ藝とと
我ハ名誉（めいよ）を得なるかと云ふ事も人背る事なし況（いはん）や人の此
法にかなりて八目に見へぬものより我しと云ひ上すまるかの際限（さいげん）

凡し吾家業のつとめに治むるものと一世の掟と雖し天下の政道を謗る人多し其奢もまさるハ分量あり人の奢もまさるハ限りなし吾力にハ相應との物ハ持てと力の分限ハしれたると我智恵も分限を知る人なし行ひも分限つゝしまんや君子乃謙の字乃沙汰ハ知りてもさし置ぬせめて我智の分限を知る人ハ今の世乃君子ぞといふなり

一　或人云儒ハ君子を立る道也むかし佛の誡守り我をしこハらさる事る乃本体なり吾智恵を理に合せして無思まさものあり一度いの事せすハ後悔なく行ふもの君として諫を納されハ世の嫁すもやし我をしたとハ我を是として非を知しと我を非と知へからずして何を他の非を非と志らむといふなり

一　或云今時の世の儒者大抵狂儒にして儒をまなふ者なり儒をまなぶもハ先その書のみを読して其言行ハ異国の風を是唐の国風人倫をまなびて是を吾この小児々として自然に吾國をかろしめらる事あるものなり吾朝の神道をすりさけさらんや吾朝の冥加あらんやむかし此国ハ本より儒教佛道を始として他の国より渡来する事也の國へ来りて往昔　聖主賢臣ありて道をとして吾國の潤色をなさしめ掟を定て守らしむ是等を取りて無しきを捨ること吾國の風俗

ガラス使用

なり今の世いかうらん文字を用ゆることを古の聖賢の掟なれども
どくはなれなんや桓武天皇の御宇には呉漢の音も儒家
にかぎり定め給ふ法あり今乃世まで儒者も法もなく幼
き童にまで唐韻にて読書させる人ありとも益何ぞや頂きと
世なふ習ひ像さへ唐人へと快かひとなくて実用実躰とこの
ありとおもふやうにして聖賢乃教へしりさながら人々さへ
あしき偽しき儒の人なりしぬ

一 筆に唐様といふは近世のことなり昔乃能書に唐様もなしと
みゆるは和し古へは能書を始として我力の際りと書るる
ところにて経ふ家和し百姓達このことは能書といふる人
も我力よりハまかふかく光せて能く読へりける物かり織に
此世の事なり前大学と法く学ぶ人あり農工商の民家々
益なきへて唐様の書札通用し益なし家にしてハ
大概仮名をも用ゐしてまて通用の文法当りて事の宮
まなし文筆に唐流と用ひハ文字とあつかひさへとしら
我かしこの人なり

一 何事もよらず人より勝世さんとも我おもり仕物からハも
かりと自慢し人々と奇妙をと道徳して益和し独り算くと
組頭をも益なかし誠の達人といへハ皆人まとおもりける
其一際よくまなくと達人といひ能々せハ名人てとかふまり

ガラス使用

みな人目を楽しむるものにあらずとも達人は義人なるべし

玄妙の教をわかれども求べし花はいふにおよばず草も芳し

野山の勝勢月は嫦娥安波にて見ぬべし月も中に月を

求めぬは中するを探るべしといふ事をも探りしぬるよ

乃中に感情を加ゆるはいふ物を探りしき風情は有りと

うやまふ境に至る人を達人名人ともいふなるべし皆人これを似る

思を好み稽古し此より常ある手法を心離るも奥加有り

無術し一切未上手と嫌ふべし

一　碁を囲むにも上手はめやすき巧なる事のみ出す事下手は非と

上手は正形をすくと覚へて能を高くするものなり相当に心

すぐる世稽古も能くちから道理極りて遊ぶに二三石に勝

あるとも是は勝といふ事はあらず又其術ふしして勝ものは漸し

勝のあらぬをこそ名人とは云ふ信乃道にありとて

一　達人は能くよく見るに抱の法有りて能静まり能動き能

和らぐ小能は悪み取る未練の能は静かなる時は遅く動

とい元嘆りて和らぐと思へども弱く強くといへども荒々しく似

る所ふきゝ雲泥の異ある有れ芸能となりしのぢく我

らしめず取りて見るを苦し

一　達人は茶の湯とても元来嗜みあるものにもあらでは習ひに

入りたるは云ふも能宗匠にたつる常に嗜みに交り常に

喜び座つきハ事にハあらで自然と全くなりけれ初より
心を静にし散るべき業を治さんハ事に除て心轉動も、
此道ハ万代の業より大概の事一つに此根の修行れしとも
心此外にあらざるなし宗あるハして挙動する時ハ業の
湯ふあらむ茶れ治ハ動静共二つなり、上下ハ人静にし
て茶をたてしよりて下ノ下ハ人をまハしよしして茶にしてを茶
躰しなくも提ハよふハ茶堂よりしめて間ふ不造作の室
小きなる内に言よ挙動といふなり、炭、花、香、茶、露次迄り乃
掃除洛仕と自然と紛あらと皆誠あり、嘗あり誠の用ハ和と
学しきと和ふあしきとハ業湯ふあしきと此和とあしき人ハ

是ハ懦弱ふ成なれり、徳ハ體なり、和を用とするものハ寛ふ
して礼にあらず、不遜と和ならぬふ謂きハ人茶席ふハ膝を交
（武士も刀をとくをさけ、心信を語り貴賤をとりへだてなしゆゑ
中なるか故、和敬なり、利休か四字を云、能和能敬能清
能寂なり、是東山源公（義政将軍）に珠光隣禮と説語なり、
又茶堂とよじめ、美しきさびりなるハ體なしやうなるをの法、
中に能といふ業なるをもハ茶の湯ふあしきとは能を為し
それともハかなしうかなきハ進退自由ならざらくせんこ
窮屈なり、信の法をさハ美しきもの見てもせなくとも無作法なる
ものなり、茶湯ハ廣野ふ大名あるやうし、寛ふして相

ガラス使用

淫らしとなり趣して人ハうつ有りときおもくし

一 武士に云猛き者ハ常に和する常に静なり弱き者ハ常に拒む常に躁し

一 香の為くもあるに先十炷香試之種をえらひとれハたゝ東より到るゝとのうち出香に頭りて香ハ無心にして其本に頭れるをよろこぶに心あるを人とおもひ穢しことより移りけも我なからぬ心をするとその所なり

一 いつもの御寄にある大同の御園の茶を自国なる人続いてと御説して御心うしろえて御気色何かとくしるしとする語る人ゆかりし我ハ雜事御事にして

一 一切の草木と見るもの木ハ山にそれぞれ濱に生たるをまし雪霜に埋もれたる何ら不要なりとみゆるハ一本ある人と附近に生きたる百草たのしく境に折梅ハ先づして芙ノ櫻なりし咲出たるを見るときハすゞ後にうみて庭の所の眺めものとしまで一と挿内咲をさる花ハいろいろ国様の花やハあまた取天地自然の縁なきなりけるを近世の人ハ山の小松を園にうつし一際曲あるをもてはやしたる枝をたハめ縮めもうしてその不快の除へあるハ継木して同じ木に異なる花を生せ源の木をもいかしを愁ふる虎枝をかき龍の形にまけし葉ハ実とてあとし松ハ愛なきもの也

ガラス使用

ありてかくしも花の大なるべきにもとこそ天津星のごと称へ
ぜし哥人なりて好せるの実（こと）ある花を賞翫もハ名と有る中
にも風流なる名跡しるしもとて強（こは）しをいとゞ中々ふくさ
名を唱（とな）ふるとして果（はて）ハ妻妾（せいさい）れ汝須なりぬハ名ハ営より
あしめたる事をも訓侭て未たゞ識ふあるおせふもめ
とのあかし亀にお見へく雲も悲しぜたものゝ侭志侭へ係（そ）ゝ
むべも恥ぬ哉なる人ぞしとあるや侭もと見ハ昔（じし）
より仕（し）るまじき事にてしめざるハいとゞせんかたなれ世の人多くハ
稀有（けう）と好みて篤くハ之光とふかく為るハなかなか音ふなり婀羅（いら）
ずとれにありくるしとのいなふハせうもがなにとよし何と

定めてなからしも稀（いや）しき形なるものこそ多かる世なりとの
かゝるを好みてあるハ籠鳥（ろうてう）たのしみに倣せずハ盆樹（ぼんじゆ）
なり養（やしなふ）人我天地父母より授（うみゑ）るからだの生ハかと
忽しても労の保養（ほやう）ハ能気まり侭ハぬに習て進も愛（あい）
あるをなをへハあるふさはしきハ励ずして営め家業な
らむ人ハさことあらんしておれ家杜丹（ぼたん）営るとはえく人
或ハ風流なるかくしてなにハ貴徳（きとく）れ悪（ろうさ）あしるあなる
すも此志順（しゆん）と侭へわくそのハ人べし

一　我かしこれ人ハ繋（さはう）しも自中（さし）ありいとおのて抱き侍中脱し天
の侭往来（わうらい）ありると志とど

一 早魃（えんまり）し船を能（まう）ぐ浩（とう）水に乗ずるハ我を忘るより利しきハなし
なり、佛の識（いましめ）なり

一 或人云凡そ世の中に昔より佛法盛（さかん）にして世々の祖（そ）
師智徳（ちとく）兼備（けんび）して佛意（ふつい）を悟（さと）り機（き）に応（おう）して八宗九宗を
ひらき一門広布（くわうふ）にして人の中をし四方に霊場（れいぢやう）あり諸の
佛閣荘厳（しやうごん）の有様、佛の転法輪（てんぼうりん）所をさとしにいとまし見え
又佛教を学ばんとするものハ経論釈疏（きやうろんしやくしよ）書籍まさく眼前
にあり、経論（ろんき）同言して佛意を悟るに便り有り、此門
に入る人凡（ぼん）俗にいまを離き住に暮（のぶ）り、上一人を始めてまつ
まで下万民に仰（あふ）るも、佛の如く尊ひ、非の如く獄（うやま）ふハ佛
の威力（いきほひ）なりしが今ハ支那（しな）天竺（てんぢく）にも出でぬ程我朝となり
盛（さかん）なり我昔にして此国に生（むま）れ出（ど）たり今此道に入らざる人ハ彼
の宝山に入りて手を空しく帰るがごとしといへり
続（ぞく）に人有りて云今此道に入事ハ甚（きはめ）て大事なり先
下作るにても云ぞ（いそ）ふつと多くして九属（きうぞく）の為を出入ハ出家
させさるを親といひ我をもつて高人となさんとする中に
是なるハ名利（みやう）を継んを求めしてなすハ皆
貧窮（ろうき）乃至なしぬる道人となるを悟りて、又古しき昔のあ
るハ学文を勧む是のみもつて名と利との能（のう）事を構（そもく）
出家するの本意ハ樹下石上（じゆげせきしやう）して衣ハ愛（わい）なく乞食頭陀（ろうづだ）

と行として六根を清浄に磨(みがき)て佛性を悟るの事
なり出世者僧といふは徳を隠し山林野外に蟄居(ちつきよ)し
さらぬとても徳をあらはさせ給ひて開山(かいさん)となれる縁の橋
め下に乞食をして在(あり)しとぞいふ公(おほやけ)に召されてもなほ
て遁れし所なくして出仕してこそ実(まこと)の者なりといふべき
なれば當時の出世者多くは道積みにてつゝしみたまはゞ徳のさとき
にいかさん今の世の僧頭(かしら)を剃(そる)より出世を眼にかけて
高人に利欲(りよく)に貪して進退を好(このみ)富貴(ふうき)にくらせんとの
りとて人を見下しけれ出世の僧も世事には賢しくて也
にて出世の多くは我慢増長(がまんぞうちやう)にして出世の者は満足く

人を見くだし無智自らに誇りて魔境(まきやう)に入りたまふもあり
然して近代の沙門破戒無慚(はかいむざん)の輩多しと祖師(そし)を
人々もしりて見かくしはしらば誠にあるまじかるべき事ども
佛法の衰へにして今の衰微(すいび)なりとはいふ也

一　明恵上人云今の世俗山法寺の伽藍堂塔(がらんどうたう)の繁昌(はんじやう)は佛
法破滅(はめつ)の時なり佛法繁昌の時は樹下石上にして佛法執(しふ)
行(ぎやう)の人多くありとの事なりといふ也

一　然して沙門の菩提(ぼだい)をもとむるは中々見ると何事も我定りて
守もいふものには僧(そう)く弥陀を求め常に御無上人あり
庵をやぶりの六字を獨(どく)としてロに唱へは僧のありくて

世の俗ハ俗の為人を安くする事なり

一 ちかころ非道を責らる世となるから類ひ多し是れさへ御さるゆへ
たゝしてハ世に言立事なり非道ハ害世の根源なり雖然
其親ききいさへ王道有職陰目の事凡下の沙汰し給ふの
事皆畏も有とかなり是非道也にして見ると非道
しきを事なりき是に僻事するものハ皆様かしまくふてとなる
まふと申しぬるものなり儒と云者ハ仏と云ふして申すと云
もハ父母の墳墓にも詣るもの忌日にハ三寶乃法をなす事
先祖より念しまゐらする仏檀ハ塵ほこりに汚されなかに非
ものとこそ奥内としてまつる人をも見りとて人なり是非成

此事ハ私の儀あくハ悲しからもかくしてうまれの民ハ國
風に習ひと道を以て仏法ハこゝにもまり修すへしとも世に
なる　将軍も諸侯もと安穏の助申と尊ふせ給ふ
世に世のはなれ風俗となりて中にも吉利支丹やきの邪法
しらはぬ世に入りても方々くも諸侯ハの申に仏法御尊
敬ハ善根と称すせ給ふなりの御また六ハあしくもしは法会
因果を説く無とあらしめ仏果を遂て善に厚し勧善
懲悪の要道治世安民の要術何事か是に志くへきや
今ハ民安く総て干戈とこらす偏にこれし至道乃まもりにて
御しせ給ふ事なり　聖主　聖君の御まて至道の法を

きは持んで何とて彼か旨とれて佛教并ゆ勝劣(しようれつ)をはせ
しやかの蟻(あり)の力とれきく人力と論(ろん)ぜんとし然中にも宗旨
性には何宗と定てあるとにて神道とさるは上もあるまじく
罪(つミ)人今の先祖より我宗旨とする神なりとも仏宗なりとも
先祖を背(そむ)く大不孝人今の代にて宗旨の勝劣をあらそはん唯
天下の掟(おきて)のことく先祖の教のまゝにまもりて迹の道をまもるへく
ことさら神の代には垂迹なされて神の御心を示し世を
めとれめもうよの給へは却て神仏に離るゝにとうある神
に詣(まうで)の人をも考へつゝ此迹にして御殿の歌の心得られ
神道にたよる人は悟らん事く

西部伊勢参りの詣く

一 何事もたゞ神ともほとけとも心にしかもおろかに深く信じ
無しては人は先さいはひ有しとも無芸(むげい)無能なりしとも兼ぬい
無り芸(けい)にかけては人として今一際用情を求めるか浮世(ふせい)
とく道は信とうしのことをい無り芸能に耽(ふけ)らは家業となし
ぬ信の道とよしうつのよしけ能々此むあひつかとふかへ
あしと方の門に入とさ先人(せんじん)にそむし参るを捨て学(あげ)
らまとくよ道より我と西へとくるて後は有頂天(うちやうてん)とやらに成
ありきと言く人に参(まゐ)るりしほとくもしくものにはやさまでしてと名
利の離(はな)れとうしき悟てくに強ましきもの多り細かの段忠

古人云人ハ一生のうちたのしミハ是何ぞとなりとへきしと云ひしまて
万事をいふ一事も不怠(すおこたらず)して也それ實と成へし又
しれ光陰(くわういん)を送(おく)るハ宗廟(そうべう)の地(いう)に捨ることなり侍(はだん)て云
也そ云ハ才一なりと云ども人の為にいそぐ我を誉る人に近付
へからすとし非(ひ)を挙(あげ)て我に得人あらハ誠き人とも云ともを
求て近付へし

一 或人云万の事の終(しい)まてなしと其も深く探(さぐ)りて却て源(みなもと)
をしらすなり能道ならぬことも能くあしきる人大概(たい)
にしぬへし詩歌乃道に非し月花を見て感(かん)に生(いきる)の
悲しむハ是非すへし其外の連(もん)歌(たい)盤(だん)棊(ぎ)の類皆多くして其

ふれ勝事しるをかたしとよしといふ事ハんとなりふとても
隠居つとのいの人にて一座世を捨(どち)しても君まで世にあて人
の事のとりて続(いろ)きまいらせ事をいろいわへ海
ありて月を消(ゆきと)の事をめぐられ人あり盤(えん)碁(ぎ)また
類(るい)もれ遊(あそびごと)ごとの好りうらん捨てるとらへのにハあや
まれのりふしさと云へり

一 まさ云ふ万の事ともなりて其者とのを離まて入るとき
物ことたのしとしい事に化し離ぬるうちハ忘物心ひ照
但し色外ものを離よりて離るる事能にこそしり過む
の重(おも)き事もなしとて儒教の聖人と云道の相承とし

由（ゆゑ）、畢竟（ひつきやう）人生れ仕合不仕合なりと云へり、さもし心と離れて
見るにあらハ色と慾にかゝりし及ぬもさらし逃られんとて
さもしく離れて見すまし我人としてなきハこれ仮戯（けげ）（うそのたはふれ）
なりとも云へる是を知りて知らしめ捨てゆ
色とさき鑑（わけ）りし残りとりのこれる所謂（いはゆる）忠孝（ちうかう）の家業（かぎやう）のみ
ひろく人の大体第一なる所ハみな仮戯なりといへども下よ
御せ人ならぬなる捨てし難へしん道ハ大なる所貴れ
も従ふ（ゆ）ハ後者も老者（らうしや）もさき明者（めいしや）もともに家
治まらし出すさせるともと誡（いましむ）るのみ而已

一　これに侍（はべ）るところ稀なし、出なる宦禄（くわんろく）めしハ皮様にはふ

は威勢（いせい）ある者ハ威勢にほこり、勇者（ゆうしや）ハ勇にほこり、愛（あい）あ
るものハ寵にほこり、功（こう）あるものハ功にほこり、能者（のうしや）ハ能にほこり、
財（ざい）あるものハ財にほこり、文（え）あるものハ文にほこり、智（ち）ある者
ハ智にほこる、一切のことの薬種（やし）にも佳味（かみ）あるを
乃ふハ虫生して毛抜と食、淡苦（ゑんく）（あぢはひ）のものハむしろ生
せと智ある人も智に執し食事ともにとらるゝの
まとめてをもとめる事と朝夕ものを慎しむべ
し

一　儒釈道外ハ至善（しいぜん）乃身と宗（うく）とふ人もゝ心なるは
しむへし、謬（あやま）ることハあやまりもなく大なりけしと心得（こゝろえ）

ガラス使用

もハ大悪人になりとぬかすり麿（まと）へハ小石くとらく人を陥（おと）く
しらしとを致せと大なる押（おさ）へもハうらしれ致とも若
れなハ次石なり此振を志しとして小智をもくゆるせ
ろかおやまちあしんや小言れなハおやまちなしを得り
ともに小事も取り小事の過ハ重過しとすこと終（ゆ）ふるさき
まあり大事をつとめ過ハ約事とまてしなど

一 常くとある人ハ道にちかし佛にちかし无常も常なり
酒をも酔（えい）くらなるとうしなはる人ハ无常をはなれ出せ
生無生の无常是をしらなし されバ歎（うれい）あり
悔（くい）あり

一 佛経得道説（とうく）の説（せつ）もありまた一旦説ハ皆悉（すゐと）にして近く言ハ
あらこそのかうり或説（わくせつ）ハ遠くむけかしき奇妙（きめう）なるをのかり是
を説人（とくひと）ハこその言のまゝにせず紀人（きく）を面白く信とも無とも
まあり又世に習ひさりけ事にすり紀事ハ聞しと大抵
誰も云ものにして習ひさらしけれと何もハんへとよめ耳
とまりて是こ曲者（くせもの）たりしぞや

一 浄土宗の他力本願とさるハ我執りしことを捨て我ハ人に
助あられ自他平等にして念佛せよといふすゝめなり
世に本願誇（ほこり）といふハ極重悪人（ごくちうあく）を仏ぞ念せよ浄土に迎（むか）へんと
云つゐことを聞しあしく解しく念佛さへ申せハいかなる悪事も為

てん と成佛をねがふとも人惜く悪れ嫡（ちやくてき）也となすなり勝へハ二男なお
やまく親の命に背き喧嘩口論（けんくわこうろん）し博奕（ばくえき）し酒色に耽も
数ふりへしども親の怒（いか）りあらしと云へども大慈大悲（ひ）の人を記
しく家ふさしにハ戸（と）居しゐば終ふハ本人ふ之家す
ミやと業（さい）を進へ毒（しゆ）を居（す）ヘて却て我るの機嫌（きげん）をとる我
門と生き返る彼十悪乃人と念仏せんといふ事なり犬と
世間ともみなふ愚鈍（くどん）なる者は無性佛事をし人を勝（まさ）りて先
覚ある者我（わ）が能（のう）我智にほこりきく人を止めしとほる
限と

一 博奕なる人相手の能勝（のうとく）なり我ハ愚（とろう）なりと知りてよる道ふ
ゆるしども相手ハ愚なりとあなどり又我が能ハ勝逃られしと我ふ
才覚ありは才覚くらべ勝てことたのしみとするものハ方
乃云がまハ才覚の中よりおこる

一 或人会何にもしく事れありらんと孔先門業して先ハ
微妙（ひしゆう）の事なるとも此事也して自他の命れ御法度
及ぶんと云ふ事ハ大事なり早く除（のぞ）き退しいふ疵也しても
命長御法度なる事ハ云ふ小事なりと云事

一 家の小破を補（つくろへ）ハ不及大破（は）といふ難も知りふしてなきと
人ハ多くしども小悪を避（さ）くるハ慎（つゝし）みの元なりとしるのみなる人知りて慎
人ハ稀（まれ）なり人病あるとき早く療治（りやうじ）をかなへ重（おも）きハ病すまじく

病といふハ戸ぼしくなくして速（さき）とりしるべきなり早く醫の手に服
治をして完からしむるハ拙朋（はとう）し大抵病をみるもハ先細密にて
完みる又未錬（みれん）の服治（かぢ）するも不完（むう）からしむるハ行（ゆき）当りのものと入
てふじうときハ用ひ不もち行ちまそて中にとゞまり今一
際むけかしをうりて彼良醫（りやうい）小見えるもハかのよく病をまぎれ
て見つけども出し當りさうの無証（しやう）ふよりて人参まじへて用ひ病の
脚をまく人ハ敎（かう）せず不診病家ふして人常に良醫を撰（えら）へ
知りふしくとも往々てし人をもまし人も指ことゝもるハ醫の手を好
まず病家まりて指醫くも指こて失あるハ醫の失ならどと
病家の失なりと人同等一乃用人とあれハ兼て未病（みびやう）を治

ゐべき事なり世まの醫（わうは）ハ遂ぞ法へりて病用人多きハ不完未
第一なるべし

一　醫ハ意なりといふや虚實（きよじつ）補瀉（ほしや）の境（きやうい）ひとを辨（わきまへ）ざるれバ
見へさり虚（きよ）ふ瀉（しや）しても實（じつ）に補（ほ）を加へるハ人を殺せる中に
虚を瀉ふて殺さるハ的面（てきめん）ふ見る由なるもハ病家の心も是と
知り醫も我誤（あやま）りとしりてとすゝ知る實を補にて殺し虚
なるもとを補ひ用ゆるハ癒して殺しさるハ病家の心も是
と知らず醫も我あやまりなりとも悟ふまつくざると雖
どる人多りては手前ども遍（のう）ある多し然れども是豊れ
徳ふ從まで今仏の名まる醫者の補にはさえふゐハ當し生で

ガラス使用

醫は濟世救民の業なるものなり當世の醫者の如く藥味を少し知りて誰は何病にもあれ素人の病を看る醫者面目を失ひぬるは言ふにたらぬ事なりしぞや

一　丹氏康頼云凡醫の妙義は細かなるに諸の生類乃臓腑を一箇にまとめて天地に合して一身に私なきものはつゝしまるゝものゝ臓を辨へずとも事なしおのづからなるにしてはまくさるせず利のみにしてその恥し

リノ字恐クハ
メノ字ナラン

一　家を保つものを若く性をもちてみだりに精神を費へからず大食をへからず房室を度をへからず細腹をへからずむやみに不性をへからず貧しきものを惰るへからず

惰ナルヘシ

病ありとも憂ふべからず寒なりとも温へからず暑なりとも涼しく涼しむべからず藥といふものを好みのむべからずやわざは藝を通し智あらば脈をへからず能あらば湯をも功あらば功あるへし甘きを多く食ふべからず苦きを控へつらを多く保ちてものは病生ずと酒を飲へからず酒呑人へども恙なきへからず

一　儒者云り心は主人形は宗なるべし目足は奴婢なり挫の也只動かずして動ゆる事ぞ動きあらへき時は病生ぜとしか從ふ事なきは主人労し奴婢挫へり心はくるゝしき也事に随にあるがゆゑに肉人の憂ることをあらかじめ恥し

ガラス使用

改ノ字作字ノ誤カ

ゑノ字ノ下ヲノ字アランカ

主人理にくらくハ從者もさからん豈家をも保んや

一 名将といふハ能く人を知りて其器を能作り下にさにて從ふ人の其中にも用人ありてまゝぬ人をもわが目に見えずして知るに能き人を好もよしあしは見ぬ事より家國いとも大に亂(みだれ)とても猫(ねこ)に似てちかしむるなり從者の謂なきは主人の恩得なり

一 明子云（清和天皇母后号染殿后関白良房公女徳之后也） わが若時の御身の足しては近く后にはぬ事のをもと能く深(ふか)い事に通き事のつかふまく身ふくしき思ひ謂ありて其世れそしつくとも通るハ必しもを習れえとひ無き事を思ひつとして我人に似るゝ。

友とすることあり常に御身に從ふものとも習ふにあら随ざるものなり

一 わが主人は主人たる家国の末(すへ)陽(すこし)まで微細(ひさい)に主人の事知るハ大威解(ひがこと)なりまた和事を家來(けらい)まかせとてつかふハ賢き人なる人にたるしも人を能見定め國(しま)とるべくたまへと家中もしせざれバハ微妙にまきハ是ゆるして主有る人をも要べくとしりて后は主に從ひ主人あまりに微細なるもハ無礼なる者てもとも主人の為け無きてわが身ハ親の恥しく主人の眼の見る時の目付從者ハ心苦しも足るなし此處主家をも揚ふるたなり実

なしは家に能ある人ありといへども人をしらねど

一 上手の将棊は名将の能軍士を従るに似たし王の大将辞なる帷幕に隠し飛車角行を以て節を通し働れ自由をさせざるもの二陣の能くとれば勢あり桂馬は節ごとにして待つて用ゐらるゝ事あるを思ひとゞまれ歩卒を責るといへども飛車角行の及びがたき功をたて皆大将の用ひやうにて功を成せり

一 大家には人数多にして主人の無未くに及ばざる所あるものは理法権のことを立て掟とせり町人百姓等は連と権威はうすきことのやうなれど権威ありがたくかりそめにもあれども

無理のしかた手擲なるときは従ふ従者恨を含み人離るゝもとなり真実をもて公に私なく下民に至りては依に至る迄君の名を汚すことなく隔なく従者も人のまゝにて常に付は善なる人の如く愛し朋友の如く親しく其交り厚くして道にあり是を善悪なるときは善なるに勝りて国事に御なる者は従者あるは武家町人共に家を興すものは全く従者の功なりありがたく僕に思ひしとゞまりて萬おろそかに損多し唯主人を大切にだにしたがふにはそのつとむる主人の信の為なり従者のうけおふるは主人の心よりおこりて大ていは損の基しあしく主人の善悪は是をしるものなり但し智あらく

はしめにハ法をもつて法を通し長久の謀なり

福

我かしこの記

一　利欲の損徳ハ人毎にしれる事を信の損益と云ハ人知らし信の損益ハ人にあり利欲の損ハ償ふ事も有り人の損ハ一生の外他生を経ても尽くす事のかなしさ平生の儀様のよし行ふに有り信に日入のあしさといふに我かしこの人なりとも父母わかまゝ主人事するも人にいふとして物とかめしても母なとしの従者ハ怒り罵りても母まで妻想和かし愛なし礼れしに義なし業を従者志すれハ朝か夕かに損多し一生楽しみなし禍ハまれなる事も有

けふありと頼むはかなし、いま日乃積るをしや人間一生の終とする日、修羅と訳し苦する人生をとゆるかしきをいふはしくへゆへん

一 恩をしらぬ人多し、四恩といふハ天地、國王、父母、衆生乃恩と
いふや、其外天下乃恩、主君乃恩、佛乃恩、師乃恩、五常の恩、
なを猶ゆくといふへし、何誰か恩愛を離て自然のとかめや
あるへき事も習ひ得るハ師乃恩なり、早く志を立て我家業
ふて得たりとも、目の農をうしなふ人ハ種を蒔苗を栽我も完
と心得て日月のめくみの恩を忘る、諸職売買人ハ我家業に世
とわたるとも心得て天下の恩をも知らハどうかれ教ゆる文
母は恩をも忘れ、生々ふして是を以ても人を非の加護なる
忠恩と思ハん悪にもしたかふに勧む人を我も完と心得て
佛は是非もなく忘る、五常の中にありて主人たるもハ儒の
恩あれハ我も完と完ゆるものハ我らしきことゝ深く恩をおもハハ
ゆるしハ冥加有りけりなし

一 佛菩薩聖賢は此法には及ひなけれど、何しても人ある
これにて人得たりし一切の禽獣草木たのもしくとしらな
つくしくは人をらしからへし

一 ちかしきものは人にくみ敵多し、鼠ハかしこく謀人にすきる
且人にくミ猫鼬犬鳶烏蛇等の敵多し、猫ハ其性陰にし
て同気相感して悪むるものゝ世に多し、陽に悪まれ（陽ハ神也陰ハ鬼也）

ガラス使用

陰にあらざるの盗心あり狐狸猫鼠蚤蚊蛍は陰火發して
毒虵犬は門をまもるものにして毒を旨とせり

一 人たるものはよろしき事ありて眼を貪る霊に惑されず神に附せ
ざるものわきまへしるべき狐狸の宿りをなすものもある正しき人すらはかく
は何もし我かしこは香性を同しきものは同気相求むるなり
慢心より乱心をなすべし

一 浮浪単人なるは心のまゝにして例ならざるのなり他にして兼好法代
乱世にして自然と此中に述懐を含め善明を書なる
もあるべし又握翫をなすの自然にして述懐の心生せり
惜むべし兼好が此世に何を満しけるは文筆に據るなり よみ徳

を挙下に示し君恩を忘れしめず民に知足の人多かりしを
述懐は世のとものふかきものは積もとれなると述懐なれとも世
をうらみ身をうらむるは多くなるのなるものはおしゆるべく
脹らんもと述懐とせり俵撫卿運を恥ぢ辞して強世る
しは類なり

今は世治て干戈を見ると衣食住に乏しからず栄耀す
但こりて知足の人稀なり然る人の云く人は世にあるに欲をす
るもしらず多しと雖物は上も賤畜より酒色をまもる人
なりとなりへはこれは教へ乱れざるものなりといへり今は世の
民轉るを酒色と出さることなかれ

一 後桃園院勅曰、凡我朝にいさゝなりともあり、夷狄（いてき）にハ忠臣賢者を挙て勒碑刻銘（いしぶミにきざミめいをほりて）せハ、忠孝なる者絶ず世に出るしらず我朝にハ古今忠臣孝子も多くありしかとも其事草まん下に埋し当て識しるさ文にも記し出しかとも、其事僅（わつか）にしてハ公武（こうぶ）同しく是を給ふにも去りし間より外乃減しまても我朝（わがてう）のミかハ唐にも恥ぬ人を多く有へし

今ハ世忠孝なる者を挙て天下に示し給ふ事あり、信にありかたき御事なる哉

一 よきを挙て登（のぼ）る人あれハ諂（へつら）ひとも、眼あかさる者ハ人々を蔑與（くミ）せさる事をも悪（にく）む方への事人乃子をもありなくに云ハ方人多し

一 或人曰、聖道の時なり、聖君ハ世を守り人を養ふ事は民に施せ楽しみ給ハん。世を恨ミ身を恨る人ハいかなる世に生れても餓鬼（がき）なる果を通れぬ人多かれハ縁（えん）に云へる時世にてもよく楽しむ事のなきハ仏果を得さるんと云

一 偏智（へんち）といふ事といふハ、強き（つよき）事と弱き（よわき）事とを皆知れるも其内に事も曲ある所見るに苦しく自らをさりて積（つも）らせ身もハ悪き事をも治り、是を悪きといふ事ハ曲を悪きなれゆるさぬか。或ハ不動大海ハ不変（ふへん）にして其広きを縮め智ハ寛広なる角、其中に不業倦（くま）大小にわたり、抱として

明らかにしてとしといふ事の能し名を明徳といふもの也、佛經に
大身現者満虚空（けんすれハみちこくう）小身現者入芥子（けんすれハいるけし）しるや、みな仏法の妙法なる
るべし

一 或人云、智の妙法にかなふハ信蔵（とくぞう）の紙墨（しぼく）を費（ついやす）と書る
事なるへしと見ゆれとも、たゞかく信の智あるに人をいましむる
らん。正質（せいしつ）ハ誠にかくと離れざるの費なる、但これ用
費をへらしたゞ常に始末し倹約（けんやく）にして人にもへらしと事なると
これハ他に借らずして損あり、かゝるハ不に成り先ずしきと
惜（をし）まぬよりなくしいやし（じ）きを好むとして一生他にもとむるを他のすも
に常せり、只常に学問し、能人に交合、他の善悪をも知るの為め
と知し貧多に沙汰なくしては[illegible]け所へし、必智の人分限にする所に

一 姻縁（えんえん）として[illegible]なさんとしてなにいふとても情けこゝろにて施せ

一 ともにかなふとも身ハ遠（たかと）ざけて便かに小事にも智を費すへ

一 らし凡常ハ只たゞしくして有るまゝを陰徳と云ふとや、[illegible]

一 村寿（うまか）に住る所昔ハ天然にしてまことなることいふも

一 云ることハ命運をも極無を離し美味（び）を好み酒をよく求る人々
を嫌（ころよ）ふもしめ人をあさけり、人を殺（かつ）すを村とす、かゝるハあしきのむす
といふもの也、是貧窮なるへし、親母もすつるほどなくなりていかにもあらし
すハ苦患ことに皆めくるを貧ぬと[illegible]の事にて人をそこなり
にくき求め何しを楽しまん、皆是すさまじき也となるべしハ也

福

ところ世に変ずるにはそれ／＼に定まれる法として流れしいふべきものとして悪ともいふ事繁き中には善悪相混(あいこん)し行ひも世を遁るゝ輩の庵には自(おのづ)から事少し時として元来はかり後先それしかくそれ／＼を待事あるともかし過去現在未来(くわこげんざいみらい)ともになすまゝに従ふゝ世のさきとものは始まりも終りもなし常住(じやうじゆう)仏なり秘するこそ善悪の市にまじはりもしつべし出家事は莚(むしろ)に坐(ざ)せんものと

一 人として人あらば人の為ありべし人は智あるべし人は恵みなりにはなる人は利有り斗は恵なる人は損有り中に人有りて能く是と云ふ人女(むすめ)人ありて彼婦なりしともにまた悪あり親の身にても血をうけし者の府ある人にはゆかしといふことをたとへなり始まる人の心は曲りてするべし然るにとかくしらぬ事はいつはり思ふ事には叶はぬ事あり

一 予六十に数多あまりて四十過れ前々となりぬに若き人のおしことはくとは能き人といふも足らざり近き世の人はうへしとよし若き月とするは人もたされは人ふるとめしぬ世に何世れ見もしていふ事とまはとふ事つましまちんとしは宝若きとことはたがへずとも笑ふ予もととより愚かにして愚なるに興(きよう)ずるの法

我かしこの記　追加　雑話

一　富貴なる家にハ皆便僻諂て諫言の人少し。さる人ハたのつらき
あるに侈て慎みしとなれハ臆病なりとて人に誑らる是故
うらみをなりにまた悪りなくとなりに立まハ常に道とも
て急るものなれども夢一に貪ると識ともけ慎むべき人ハ六ヶ事
似とも侍に陰者不長と云ことも此嬰児も乞ひもとめたる仁の应
なし乞ふへし一切れ苦劣皆此中にあり積善れ家に余
慶あり必長久なるへし高いほどまて有ものなるかな、
変化ハ世の中なり盈るを虧ハ天の道なり常住の世ハなき

嗇　貪　貧

ことゝするなれども絶し小人は僅くなるに情なく妹と然ハ恪
嗇とましして仁道をさらしむへり豈天ハ此をけんや附まり
七りけ日に懐ぐ行きくる偽音小課乃おのれに害にありしもの
かりくなりそへき事とて佛と喪昔貪昔の人多し生性
れ貪者ハたのしみをもとめりて貪るにより一生安事る
も多し甚へさる人は慈に媚として心忙しき附一足漏遺
婦もいふにも邪魔に陥り一生をあしらひ或ハ罪人となるも
此境よりおこるなり大凡一切事の物なり縁へと然る
附なんとも母ともいふハ急ぐことへ重みなる事なり燈消へと
また附焼くと減して沈くと求むるハそのまゝと存するに桜るに

ま金銀ハ消うせるものなりと申し大かたの人ハ金銀にまよひて
家業をなをさりに捨て他に走り心怠りをして身を労せ
ず一旦の利を得る事を求む大かた心に違へハ利を得るものなか
りし故に亡ふるものなりと申し彼の知足を守る人ある人ハ亡る
事を慎みて後のみをもとめ運の帰する時を待ハ文学も
まなへし中にも我か人の心に出る物のそかれるものと
いふなりと云り出る物のそこハ貪しき人するとはいへ善も
と知りて渡世に隔へきして富る人とならんとするにあり
なるなり

一 人一生ハ果相応なるへきものと定め知る事を得るにハ稚きを思ハ

親ハ子を育る事に遊ばせしと申し芸能をならはせ
なるへしそれハ世にも寛なりけるものなりしかれとも狭りする人
それ人ハ物をまなはしかし十五歳にて二十歳に至るまて人の身
まりに彷彿なるんも此ある事なし性の人ある事なく
思悪に逢ふ事多き也の身に至へしと常に心にとめおくへし
道しき事に臨みてハ火の中をも入也と思ふはかりなり只十分を
尽し大人ハ自から知れぬる事を知り毎事に目提あるへし老
いハ死の道きまる事を知り世話に走りとても常々ある事を
悪とせへしなにもてハなるへて人を知るものなれとも掟にまかせ
人のうきふしをかへし候

一 稚きときよりくく親の心ハ憐ふ中さうき取きものふし楽
男子ハ背ニ左ふ長（ひやうろう）くもちふるいまうし女ハうちふうふなを心
またんとやうるうしつふふ脇めふんするとおりふ中に卑怯（ひきやう）
なる者ハ鬱（うつ）病（びやう）く患（うれい）つし婢（ひ）女（ぢよ）ハ嘴（すなを）れつききのつるもハ七情乃
起きりまつりふ常意ふ淫（うき）とし矢（わい）ひとして鬱（うつ）滞（たい）せる中
人ハとせりふを質（かと）しみと見もる女ハまを中是（せ）非（ひ）をえりて女ハ
うち女うふし楽と憂鳴く七情のままうくと和し押（おさ）ゆるを知れ
て鬱病と生して譬（たと）へハ元気れ能く人衆る食あふ黒（ろうよ）に食
蓋（ふさ）とし乾きむ噎（むせ）と生し虫と生まるかし歩ちいハ中人
止れ女子ふ琴（こと）三（さ）味（み）線（せん）と習しうる事ハ若（せつしう）生の部（ぶ）より女

古人ゆうしなりしのと見へたり彼（れ）ふきことわくへ無とき音
聲とえて自然と鬱滞を散（さん）ずる理（とうり）まつてしろれるしを
有へきものなり

一 逍（せう）遥（えう）院殿（西三條）御息女ふ進せられし庭（てい）訓（きん）一巻ある中ふ
云く光ふ奥へへるまじき大概（かい）山伏、舞まん、猿がくさん
むき、座頭、尼、おふ家云と

一 寺参りし成る人あるしうちニ云く海ふうしう他詣（せんちえんき）縁者の人
老（らう）子（し）荘（さう）子（じ）なとけ書を家（うか）てつうつりも是と懐く閑（いで）に入（ち）道
といへりされより思（おそ）ろしもおりのて見るまり聞し
女は性子（そうじ）と如し人ふまた言（い）くとみたり万あるこる大抵れ

ガラス使用

造化の妙なり天地に物ある時は数しれず一つをしれば皆
しれてなきものもしれしかるを論ずるに似たれど
少しも智ある人は何とも思はざるものにして是にいたる
物は金も多く有りと見へたり絶し山に生ずる木々をもつて
皆それぞれに何としても斧をもつて是をけづり巧として
其髪を削り木をもつて良材として柱梁と用ひて家にも道
らは木をもつて薬洋してら頭は薪は曲をもつて採木になし
下薪なるは皆もとより浴に入るとて万物をもつて規矩
あるとしてなくとも人産まれて乳房を口に入るは教なり
春ところは天地の気なり何もなくとも捨んは情の深意也

一 まづもつて一偏に見る人誠にあやしくおもふや
一 稚き子のため掬にたとへたるに女婦めいては家は邪鬼なれ
あるも狐狸など是業とし呪として其間にも付くも
法なる正し墨縄の心得なりて直なるものに邪あり乃
物をば直の規矩あつをもつて直すべきとなし
一 武士民同倫をしめす世治まりては世の人々あるといふは戦国には
治まりて人心ゆるむものといふ云古今戦国の有様
乱るゝ時に治まりては戦死するものにあらずや是天命の
守護ある世に人多くあるといふは戦国は天下一統に
就も万民法を守として山林に逃ても人倫の道あり

同ノ字同字ノ誤ナラン

論字倫字ノ誤ナラン

ガラス使用

証ノ字十八ヲ

諫く性国なるハまかせても依遠境に至り懸しけれハ四民
ことに蜿蜒の泳渉しけるを人せんや治世にハ人安んして
怠りて心を労する事なし然るハ十三四男子ハ此に不満して力を能
くり戦国の十倍とも云へし神代の祖神二柱より世擾
へたる一日に千頭を絞殺さんと宣へハ千頭あまり五百頭を生
むとの給ひしハ治世に人増長に至らん事を論し給ひ

一 又同世ハ治りて人衰へるとハいかん人も常にあるときハ乱治
世にハ人懈りて金気少し精神費へりて多くまさるハ去へ
まに健なしとんけ衰落の種を後継の人得く健ならす
まめやかし菓園に植かるも能種能苗を植るハ佳菓

ともからやしと云へり去人の云ける人の壮衰ハ世の治乱によ
らず佛説にハ濁世末法とて世と人とともに衰ると云か
ましと云へり但し此説信しかたし陰陽家にハ上元中元下元
とて（各六十年宛）百八十年を一周として治易し盛衰ありとする
其唐の歴史を考へ見るに皆其周数に叶へり空数保元
年来と考へ見るに其周数の度ハ上元に当る人壮にして
武に名将名士あり釈に名僧あり藝に長たる人も皆上
元に生まれて上元中元の間に功を立名誉を施らせり今
下元の末なれハ人の衰ふると見られと云へり此説去人の云ける
各千々理ありと云へとも治世にハ必人衰へ理ありまして治

世の人怠りて勤し人多し勤しんぞうるもいやし民ともさとし
名誉とする人有るへしんば能し武たるに志し為ものを術
多き弓箭の常士ありとも浮世の事に心ざすもの〳〵は害
名を得るへしんば正しき知保有りとも有るは日本にあら
得るもいふ空しき隠ふ居し沙門は山林幽谷に至し有徳
の人有りとも人気へしんば世間を沙門して去悪の紛
は人気ありとも世間は沙門にて元を天下の大俗の下れ
中に混雑の人多う酒色に耽り戯芸に溺れ狂言綺語
世中に掟てあるは素平世の民乃心ある沙門と大俗ある何
も心移しさらん怠るは日は少なく勤る日はありつへしと名得あら

むや静かなるは人世に忙しくもして我身を暇なしと武士は弓
馬を勤め沙門は行を怠り酒色に耽るべき事なし戯芸
に拘るべき故なしたのしみ事なし我勤むるを怠るは名得を
失するなれ百姓の民にいたる此理を知ておるへしおのが求むべき所は
一節に執志ならべくと執心して修行に名人と有なるし
浮世には事多くして閑中にいる人ならで名得とま
して彼に移り多芸の人はありとも一芸に秀でたる人は
理を究めて世の浮かるに人は善に理を知るへしと云
一　或時予が草庵に人々集りてありし雑談しあへる中
に、ある人の云ふやう此程或儒者此事をもつて人にかたりし

ガラス使用

世に常住の事しるを教多きるしそ然而釈氏の手にかて
はまりし誹謗なりなとも言習ならはいゐりくゝりには
はひかろ世の費なりしんともわらくたまへんとそまり
まん人ならまり

厳ナルヘシ

若釈氏僧侶の事といへとも耕作をなし織なふ
業となし寺院をなく退るの地をも作し山林を
穿市中を扶て道場となし伽藍荘羅の結構に
良材金銀銅錫を費し又わか足らぬなかる所を
及び勝手は俗家にかりて香花油燭佛事の
器之寶の使ともに賤き費とまでも皆是具

半眠り

食物にありては命を続くの要なれとも飯を
食ひ塩を嘗て足ぬべし是は旅の者なれとも飯と
なし味噌となしたるは弊なり山に猟し浦に釣を
なすを常の事なり食物の高家に至ては除き遊し
衣は服を隠し寒を防ぐの要なれとも布綿の白
きにて足ぬへし蚕婦の貴なり紗綾を織なり
染縫の色となし織人の恵を費多し
家居の広荘を貴なり雨露を凌き膝を容る乃要なり
是は葺覆に茸草の莚めしは足ぬへし極人巧なり

はなはだ無要の事ならん
一切の器材（きざい）に弊（へい）あり頗く欲し今其悪あらば止め
べし饗応（きやうおう）茶事に無要の器物はしくもなくて宜
商人ハなを貴ぶなり
旅人ハ事に大切の米と酒とかもとより何ごとや是なりて
順くとしつひ害を生じもの也酒を好む者は
して有（ぶ）しとの兵可勝也
武昔（むし）ハ菓子として一切のこのみハなきもの也
べりかく高ふとのハ除べし
女鞠（きく）の類と好む舞楽（ぶがく）一切の遊芸（ゆうけい）ある中にも舞妓（ぶぎ）

狂言（きやうけん）放下（ほうか）の類ごときにいたりて経営（いとなみ）ある事莫（なく）て
なりなる道なし
戯（け）場（ぢやう）の類ひ琴（きん）碁（ご）は能ある者は能書に宜しく
能くと貴しき人あれて浮世の人ハなお弊（へい）あり君の乃
悪（ふく）む宜な除（のぞく）べし
煙草（さいこ）ハ番（きん）の産（さん）にして世にも用ある物なりといへし
うしぞ低（え）の助となりしが田（でん）の秋（せえ）も悪しく
し銅鉄（どうてつ）と貴し順くとしつひの害多し弊の事
あるとのつは彼の事に煙草の文字の事ハさ
はく迷ふ貴ふりしかれ無秋氏は貴ふかる事は無の（のへ）秋

民は彼の嫌ふ所にして貴ぶべし、煙草は彼の好む所にして貴ぶといへどもかへりて不害し

けれバ清むものハ貫通して一しんもの書を学せる儒者を学かり松こそ宝を貴ぶなり、かく著しるもハ残すとのふ継ぶ生農のうちけ民とこそんもハ後世沙汰代々ありさまかりけるを耶かりとせんと云り又問云此貴ふよりて農を云る人八九分耶るべし此人何を経営とせん答云男は耕し女ハ織を道とん何を経営するとせん又侍に入るを云、わざ士ハ高人なり、道の沙汰ハ士ぞとしいふとも此論を始に勘定れ相くらき事あり、泰代にも人数を多くしもてしるものハ土地ハ広し是を耕業とせん小作ひなるべし、近代すこしむかしては人は多く土地は限りあり、田舎の家々も少に昔百軒ありし邑は今千軒に及べり昔五人にして耕作せし地は今は十人の作地となれり、かくて子孫は家々分けて昔に移り国家の民は多くし又一重り此民に彼の貴ぶところ八九分の民を加へられしと何を経営の地あらんや、婦は織にあまりて手すさみをせんの、此時は飢渇せんか又は困窮しきなり、今後世に人数多くなりし民を貴んで多くなられんは幸相ありし今の世をさかんにいつしか百軒にして高きも今千軒にして高なりし人毎に工商がしくて欲多くあり、諸職のむずかしはあしきを云ひて人の多きを地なりて近くの貴れ共其上は煙草

ガラス使用

ありぬべきことを是と経営とする人世の人数の二分なりといへり、
是則天より下し給へる世渡りの稼なり、天の命なる事を恐るべき
しておろか無益の事のみをしらで天下一統に用ひぬもの
なれば小人の眼に貴しと見ゆるものは皆天の心に背くものなり、
天下にむかひて一事も捨るものなし、彼の貴きは無益と
いふ事を耗す限りの外に出るは皆貴きなり、先にまさりせしとする
商人のなり能は事を決まるべき主をしらぬ人は儒なる随分に
とりつくんでまたなりふりのあまり行ふは能ふ酒色を呑
てんなるをも捨てん、是去年の世の民の業なり、それを母に附置く
挑くるものなりしれの窮居なるは損なり一生限りなり是商人の妙

定なり他し街の家をと忘るる所は勘定あるべきと云なり
一 儒士仏者和漢の書を見ても道を云ひけ外に巧なしと云り、太極は世を
極なりといふも学者にしがたきは田舎の儒者なりとあ
るやうと見る人の為に是非しる人の御言方にふまいて
是一偏の
一 歌人公家の風俗和哥の道は識にあらざるものなりとせまし
るものは哥人の徒なり中に当流二条家の教は上一人に始まり
てまゐりて下万民におよぼり、中に通じて中和を元として
幽玄優長なるものなり代々の撰集伊勢物語源氏物語定家
の庭中なる風雅の道を習ひよくて人のよくて悟り幽玄

温和の中よりおこる見識なくしては信の德ハなりがたかるべしけれ
或儒者の言ることのふ伊勢物語源氏物語ハ淫しく
ものとなすまじきことなりさしもの田舎の儒者の偏見にし
てこれに就ハ先ハ代々の天子も御侍読を避させ給ひ
しものなれバ是と思ひともかくもあり。されど綺言の罪過をまぬかれざることなし
然ニ源氏物語ハ紫音資長の人々見て高世の宝
かりとハ無きの称号なりともが艶書なりと見ぐるしき眼
うへをあはしき人やむを手の及ぶべきものと見えなり又聖徳太
子とも大悪人とし守屋を忠臣なりとして其事の称せる和人を
せり却て我見識の拙きを顕はせり却て癖ハ極まれて日本に津

とまらざるハ天地の始なりとまず生ていふ者の嬰兒を殺し畏る
是天地の感応の道なり尤元無の故にあらしむと無して
まして人をも俗学の人をハ各別なる事勿論なりかゝる人ハ虚しく
あるべし俗学の士ハ書籍にあるべし信の德信の事ハまれ
人の德ある眼なくてハ尺も曲へかく八方に德をもてなすありて調せ
延く濁るく理を量りしもて其心をしるなり田舎の儒士
なきの首ぐる知らぬ事なり支那を宋朝よりの学者
へ文章の義理にあらずして聖書の意味ハ失へりとなん
一 又曰上手のそし仁政ハ大にしてもよりも雖し下庶人にありても
見さくふして仁者といふ事の合ふよしをあらはし先門に

れたハ不常に有りてよき事なり忠孝乃はなしハ大成事を源
を尋ぬるもハ仁なり君父にして親の謂なるもハ忠とし孝と名
づけり仁とハ慈しく恭しみを行ふ府ハ利益なり孝なり源ハ書す
眷属を能扶助しまたあしハ隣家隣邑に施し兄弟を
あハれむ人乃為を同体の思ひとともに禽獣を皆ふくも
皆唐人の仁なり又人あり温飽に居り飽まて食て楽しむとも
衣食なし一猪一畜を殺さず書を読むとも飲食しきわ不ハ
ともに一炉火をよりて寒を凌ぐハ仁者の楽しむなり楽の中
乃衣食の徳なふ人にして菩提を求るなりと思ひとらて仕
遂に人の父母妻子従類を捨蘭若深林にして身を捨る人あり

殺ナルヘシ

仁慈ハ是佛菩薩最第一の要決なりけ門を破りて猥りに出
離する人豈仙洞に入事を好んて舟を山にの用せ車を以て
海を渡るに似たり穢土火宅として猥りに厭ふのかる者ハ近
き火を避て眷属を捨道を立るの大不仁者なり但し三界中
におゐて善知識の眷属を捨て出離せし人を有無し是ハ
出家も尊く衆生を救ふの徳ありて一殺生の程にて僅の
眷属を捨身の衆生を守の人なり今の世の出離とハ雲
泥の境界なり今出離の人といふとも佛法の深意ハ悟り
もしくて発心集のまゝなる草紙なるものともを見ぬ婦を
らむ世よしんと世をられなと見るをしも淫事なるのみ

ガラス使用

かゝる書ハ古き書といへども人に語るまじき事ハ却て、
魔道に陥る事あり。まづ平家物語をみるに小松内府
ハ誰しもの賢人なりとや、父入道の悪逆を諌めて終に
ハ熊野権現に縮命の願をたてて薨せらるゝもいかゞの事なり、
賢人なる重盛何ぞかゝる懦夫のふるまひあらんや、父の悪
逆一家の奢となりゆきて栄耀をきはむるにハあるを憂し重病
遁るゝ道なくして薨し給へるハ誠に平家の不幸とも云へ
に入道悪逆の禍をまねきしハさもあれ一家の棟梁君に忠あり父母
に孝あり、二男宗盛ハ愚成り、一門に器量の人なし、何とぞ存
命にて君に忠をいたし父母にハ孝く諌言せしめんと思さん
ゝ父を諌て一門の滅亡をとゞめんこそ死ハ一旦にして安し、賢臣の守
りて患をとゞめし一門をたもたせんハ大将の道なるに
其務をすて先立て世を辞するハ是未練の致あらんやとて
書にしるす事なきハ重盛公をあまり称美せんとてかきて懦
夫の穴におとしいるゝ今の世後世に及ぶときハ君父を諌る
人もあらんに我躬の潔からんとて忠をもすして忍ひて謀をなす
もせんハ誠に忠孝の人なるべしともいへり

一 予もとより卑賤にして愚昧なりといへども王城の地に産
れハ太平の世なりさまく高貴の陪席に候せしもまた、
能者の傍に侍りて耳目の触有しこともあれハ誠に其事を

ガラス使用

まゐらせしハ世に仕る事一つなりとも孝行
者の道なれ共事をなすといふハ父母存生のときハ世の事
さしおきに紛れて仕ふる事をなさゞるゆゑ今家に事
とゝのはず身をほめ而後悔ぬといへども今はとゞかず
わかれど是一つなり父母に孝を尽して後世をも父母に任
悔ぬとみゆるとも是ぞかしとくよく心得くはし是一つ也子弟
今日の身をなし百行を勤むるにもとにせば一大事を失ふ人
なりゆくの種なるべしある人として父母存生の
道を孝心なし忠孝の道に大切なることを不忠の人今日
心をおこす事を節とす本ハ今日よりハ忠孝をつくし家
業に忝き人生れて日ごろ離ぬ事ぞ
父母ハ一度にのりて事を取しても何の益かあらん
されハ人と生まれ覚とさとりしに一大事と見へたり孝行ハ百
行の源孝行ハ孝なれ門に出しと云ふなり父母存する人
ハ昔は我道と同じ事なりとも今此身と見るものか
もとは道一日の親を信じ人ハ別道ありて帰孝なる迷に
親をや思ひ上勤めや身に悔るれと御さとりあるへし

享保十五庚戌年孟春日

洛西壬生隠士嘯夕軒
宗堅

ガラス使用

859
72

5387

于時
寛政六年甲寅閏霜月日
門屋尹雄　寫